

# リチャード・ライトの別世界 — 悲哀を超えた俳句 —

小林 明美<sup>†</sup>

## Richard Wright's Quest for "This Other World": How Haiku Enabled Wright to Transcend Pathos

Akemi Kobayashi

### 1. はじめに

リチャード・ライト (Richard Wright 1908-1960) は1940年アメリカにおける人種差別を告発した小説 *Native Son* により、アメリカ史上初の黒人ベストセラー作家となる。常に自由を求め、社会の中で居場所のない人間の不安、恐怖、苦しみを生涯追い続けたライトは、闘争的抗議作家、亡命者、悲劇の遍歴者と称されることが多い。そのライトが最晩年に約4000の俳句を作り、そのうち817句を掲載した句集の出版を望んでいたことはあまり知られていない。その句集の出版は彼の死の38年後1998年ようやく実現する。多くの先行研究の対象となった小説に比べ、彼の俳句は未だ十分な考察がされていない。本研究は彼の俳句を分析し、彼の生涯と自己認識の変遷との関係に注目し、最晩年にライトと俳句の間に起きた反応を多角的に考察する。それにより彼が俳句を通して到達した「この別世界 (This Other World)」とは如何なる世界であったかを明らかにする[1]。

### 2. ライトの俳句の特異性

#### 2.1 痛みから生まれた俳句

ライトは1959年8月、パリで南アフリカの青年から借りたブライス (Reginald Horace Blyth 1898-1964) 著 *Haiku* 全四巻を通し俳句を知る。ライトは俳句との出会いを、オランダ語翻訳家の友人マルグリット・ド・サブロニエルへの1960年4月8日の手紙に次のように述べている。

これらの俳句は私の体調の悪さの中から書かれました。私はひどく過敏になっていました。私の腸がちくちく痛む時ほど、過敏になることはないのです。そんな時に日本の詩がやってきて、この神経のエネルギーを上手く使ってくれたのです[2]。

当時ライトは1953年のゴールドコースト取材旅行中に感染したと考えられるアメーバ赤痢の後遺症に苦しんでいた。息切れのため長時間タイプライターに向かうことが難しい時、単語を音節に区切る作業は、彼の体調に合っていたと長女のジュリア・ライト氏は述べる[3]。ライトの俳句は痛みの中から生まれ、かつその痛みを抑える作用を及ぼした。ライトは不調の中で「日本の詩」という器を得て、腸の痛みを上手く創作のエネルギーに変えることに成功した。

#### 2.2 季語に心情を込めた自然詠

ライトはブライスの *Haiku* 全四巻から俳句の心と様式を学ぶ。ロンドン出身の英文学者ブライスは1940年来日し、鈴木大拙から禅を学び、日本文化に関する多くの著作を発表している。1949年から1952年にかけて出版した *Haiku* 全四巻は俳句を体系的に英語社会に紹介した最初の本とされる。

ライトの句集 *Haiku This Other World* に見られる俳句は、その殆どが有季定型自然詠である。掲載句816 (817の中に同一句があり本論では816句とする) のうち715句に季節を示す語が使われ 657句が5-7-5音節からなり、すべてが三行書きに統一されている。これは当時も今日も英語俳句としては希少な作句パターンと言える。今日の英語俳句において季語は必ずしも必要ではなく、英語には共通認識としての季語も存在しない。表記法、音節数も様々である。ライトは *Haiku* 中のブライスの俳句観、自然観と、ブライス英訳による日本の俳句2465句 (主に芭蕉、蕪村、一茶、子規) から、自分の作句パターンを得たと考えられる。

*Haiku* 第1巻の序文でブライスは「俳句は生き方である。……俳句は禅の観点から理解されるべきである」「俳句は荘厳、無限、永遠を避け、優しさやつつましさにふさわしいものである」「俳句は美を目指すものではなく意味

<sup>†</sup>2023年度修了 (人文学プログラム)



大都会の中の孤独と居場所のなさが雪と氷雨に詠みこまれ、黒人少年の思いが雪に込められている。やがて1938年 *Uncle Tom's Children* の出版によりグッゲンハイム財団の給付金を受け、ベストセラー *Native Son* へと繋がる。

### 3.2 パリのライト — 人種と国を越えて

1946年ライトはフランス政府からの招待を受け約半年パリに滞在し、その翌年一家でパリに移住する。ライトは1951年エッセイ “I Choose Exile” の中で自らの状態を voluntary exile (自発的亡命) と称し、自分にとり命そのものである自由を求め exile を選択したと述べている[7]。ニューヨークでベストセラー作家となった後も、むしろそれ故に一層ライトと家族は地域で白人からの差別や敵意の対象となる。黒人という理由で家の購入も拒否される。ライトは「パリの1ブロック四方の中にアメリカ合衆国全土におけるより多くの自由がある！……自由は命と同じだ」と述べ、物質主義と功利主義が全てを支配し人々の心や頭を蝕む合衆国の将来を悲観し、自由すなわち命を求めアメリカ離国とパリ移住を決める[8]。

1954年当時フランスは植民地アルジェリアとの戦争を抱えていた。それにも関わらずライトがパリ移住を選んだのは、やがて植民地独立運動につながるパン・アフリカ運動の拠点となるのがロンドン、パリなどのヨーロッパの諸都市であったからと考えられる。またレオポルド・サンゴールらがネグリチュード運動を展開し新しい黒人の意識を作り上げたのもパリだった。これらの運動を生む自由な環境がヨーロッパにはあった。パリ移住後も、ライトはアメリカ国内の人種差別に対し抗議の発言を続ける。元米国共産党員であり人種主義を厳しく批判する黒人作家ライトの活動は、アメリカ政府の非米活動委員会の監視対象となる。移住後亡くなるまでの13年間、ライトはCIAの監視を受け続ける。当時パリ在住のアフリカ系アメリカ人文学者たちはアメリカ政府から国家の安全を害する脅威とみなされ、特にライトはその長老的存在と目されていた。彼らを分断しようとする不可解な事件や圧力がライトの周りにも生じ、パリの黒人文化人たちは互いに疑心暗鬼に陥る。ライトも他の団体から次第に距離をとるようになる。しかし世界の黒人との出会いにより得たアメリカの黒人から世界の黒人へという視野の拡大が、後の活動の幅を広げたことを考えると、渡仏はライトの人生において不可欠な大きな転機であったと言える。

### 3.3 悲哀の地アフリカへ

ライトはパリでパン・アフリカ運動の指導者ジョージ・パドモアと出会う。米国共産党に入党、後に離脱という共通の経歴を持つ二人は親交を深める。当時ゴールドコースト独立運動の中心的存在であったクワメ・エンクルマの政治顧問でもあったパドモアの勧めと協力を得て、ライトは1953年6月独立運動の盛り上がるゴールドコーストへ三か月間の取材旅行に赴く。その体験は1955年出版の *Black*

*Power* の中に克明に記録されている。この地での体験からライトはルーツ (root) とルート (route) の意味を知る。これが彼に新たな自己認識を与え、後の「別世界」の構築に繋がったと考えられる。*Black Power* の中にその体験を辿る。

ゴールドコースト上陸の第一日目にして、ライトは自分が「アフリカ人」ではなく「アメリカ人」と見られていることに愕然とする。また「私は黒人で彼らも黒人だった。しかし私が黒人であることは何の訳にも立たなかった」と彼らとの隔絶を痛感する。数回登場する「私は何もわかっていなかったのだ」(I had understood nothing, nothing…) という言葉は彼が抱いていたアフリカへの郷愁が全くの幻想にすぎなかったことを示す。想像を超えた不衛生な町並みや呪術的生活習慣に哀れみではなく嫌悪感を抱き、あらゆる階層の人々との間に相互理解の困難さを感じる。エンクルマを熱狂的に支持する民衆、アシャンティ族の王、黒人知識層、若者たちとの語り合いの中で深い隔絶の悲哀を覚え、アフリカを a Land of Pathos (悲哀の地) と呼び、この言葉を *Black Power* の副題の中に用いる。奴隷生活とは別の、植民地支配という苛酷な被抑圧の歴史を強いられたアフリカ黒人との間には、出発点 (roots) が同じでも辿った経路 (routes) の違いゆえに非常に大きな隔絶があることをライトは痛感する。滞在中にライトは自分のルーツも、相互理解も、アイデンティティの共有も得られなかった。しかし被抑圧民としての共通体験こそが連帯に繋がることを一万人のエンクルマ支持者の集会で訴える。

表面的には、私は殆どの皆さん方にとってよそ者と言えるかもしれません。……でも(苦しみと自由への渴望という)この遺産は人種よりも深い連帯感をもたらしています。それは全ての人類の苦しみに対し敏感に反応する人間らしい心です[9]。

ここで注目すべきは「苦しみと自由への渴望が、人種よりも深い連帯感をもたらす」という信念である。ライトは人種のルーツ＝アイデンティティではないことをこの地で悟る。先祖や故郷という点ではなく、現在に至るまでの時間と環境といういわば線、面、あるいは空間における他者とのせめぎ合いからアイデンティティが作られるという認識を得る。さらに黒人として人種差別の被害者であるのにアフリカでは黒人から同朋とは見なされず、アメリカ人という西洋の一員として加害者の側に立ち、近代社会の内と外に同時に存在せざるを得ないという二重意識を抱き続けることにもなる。彼はルーツを持ってないという体験をむしろ逆手に取り、ルーツを超えルーツにこだわらない生き方を選ぶ。彼はこの取材旅行以後、バンドン会議出席(1955年)、黒人作家芸術家会議設立(1956年)など精力的に活動を続ける。彼は失望しても絶望はせず、人種を越えて世界の被抑圧民との連帯を模索する。



## 4. 俳句という別世界

### 4.1 rootlessとnobody

生涯の路程の中で、ライトはplaceless, rootless, nobodyという自己像を獲得する。これらの自己像は、最晩年に出会ったブライスの *Haiku* の中で示されている精神と相応し響き合うものがあった。その両者が反応し生みだされたものがライトの「別世界」であったと筆者は考える。

点としてのルーツを持たなかったライトは自らを rootless と称し rootless として生きる。欧州各地での講演をまとめた “White Man, Listen!” (1957年) から rootless についての彼の言葉を引用する。

私は根の無い人間 (a rootless man) です。しかしそれゆえに、心理的に動揺することはないし、いかなる点でも特に不安になることはありません。殆どの人のようには、私は感情的なこだわりや自分を支えるようなルーツや理念的な忠誠心などには憧れもしないし、必要とも思いません。……地球上のどこにいても私は落ち着けるし、その気になれば、またある景色や生活の雰囲気の魅力を感じれば、最も異質な非常に異なる環境にも簡単にとけこむことができます[10]。

これはライトの rootless としての生き方の宣言であると言える。この rootless という生き方の表象として *Haiku This Other World* の巻頭句を挙げる。

- 【1】 I am nobody:  
A red sinking autumn sun  
Took my name away.  
我が名なし秋の夕陽の奪ひけり

巻頭句が多くの場合そうであるように、この句もライトの代表作とされる。ライトがこれを巻頭に掲げたことには深い意味が込められていると考えられる。先行研究では “nobody” と “a red sinking autumn sun” の意味について多く論じられてきた。木内は「“I” は禅の無我の境地にあり、ライトはアメリカ人でもフランス人でもなく国籍を持たぬ国際人になっている」[11]、皆河は「大自然の前に、人は固有名詞では存在せず普通名詞の存在でしかない」[12]、中地は「無我の境地に達してこそ見える地平が開けていることを暗示する」[13]、高橋は「フランスに亡命し無名の存在となった自分を nobody と自嘲し絶望感がにじみ出ている」と論じる[14]。これらの先行研究が見逃しているのは nobody の真意である。nobody の後ろの : は英語俳句では切れ字の機能を持つので、ここに詠嘆を読み取るべきである。ここで nobody は故郷や国に縛られず、どの政党、宗教団体などにも属さず、世界中どこにでも順応出来る人、つまりライトの言う rootless と重なる。単に国際人でもなく、root を持たないが故に真に自由な人をライト

は nobody と呼んだと考えられる。nobody には、私は私という孤高の姿がある。

黒人・第三世界解放の活動家として、当時欧米でライトの名前は広く知られていた。特に50年代の冷戦期には CIA による監視下で、リチャード・ライトという名の持つ弊害を感じることもあったと思われる。従って「名前を奪った」ということは著名ゆえに生じる様々なしがらみや弊害から解放したことを意味すると解釈できる。この視点から見ると “took my name away” は「名前の持つ束縛を取り去った」という肯定的意味を持つことになる。“A red sinking autumn sun” はこれまでの人生の路程の総計であろう。従ってこの巻頭句は、艱難を経て今到達したしがらみのない rootless, nobody というライトの生き方の表明と読むことができる。筆者はここに、この句を巻頭に持ってきたライトの真意を見る。

### 4.2 lonely

ライトの俳句に最も多い感情形容詞は lonely (17句) であり、そのうち11句で “How lonely it is (!)” という感嘆文を用いている。このことからライトの俳句の基調は lonely であると言える。ブライスは *Haiku* 第1巻「禅、俳句のための心の状態」の中で「禅においては、あらゆる言葉は論理的に反対の意味をも含む」と述べた後に loneliness に関して次のように述べている。

“loneliness” もすべての他のものと相互浸透し合える状態のことである。……寂しさ, loneliness, は俳句において、禅の無に対応するものであり、絶対的な精神的貧しさの状態である。その時、我々は何も所有せずにすべてを所有するのである。それは喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く心の状態である[15]。

禅の逆説的真理に従うと loneliness は単に「寂しさ」ではなくすべての人に共感できる状態、何も所有しないことは全てを所有すること、rootless はどの様な環境にも適応できること、誰でもない nobody は誰にでもなれる人ということになる。ライトはここに rootless, lonely, nobody という在り方が受容される世界を知り、この思考世界を彼は「別世界」と呼んだと推測できる。

*Haiku* 第1巻「禅、俳句のための心の状態」でブライスは13の心的状態を挙げている。その中で「あらゆるものには自己矛盾的性質があり真実の持つ矛盾を知った時に沸く笑いが「ユーモア」であり、「ユーモアは二つの対立要素の均衡を保つ」と述べている。さらに「勇気」は「生きる意志」であり他の心の状態はすべて「勇気」から生じると言う。「禅、俳句のための心」に示された13の心が最晩年の苦境におけるライトの活動を支える力の一つとなったと推測できる。ライトは亡くなる二週間前まで講演会やラジオ出演を通しアメリカ合衆国の人種差別、西洋社会によるアジア・アフリカの植民地支配、アメリカ政府の政治

的不寛容と監視体制を批判し続けた。

## 5. まとめ

ライトは生涯、自由と生きる意味を求めて移動を続けた。その移動の終着点で、損得やしがらみから解放された nobody としての生き方を俳句の中で宣言した。ブライスの *Haiku* を学び、ライトは自然の「優しさとつつましき」に目を向け、俳句の中で自然へ還ることを試みた。そこに見た世界は、かつての抗議作家ライトの見た世界とは異なるものであった。彼は怒りを原動力とするのではなく、rootless, nobody としての生き方の中に、怒りと悲哀をのり超える方法があることを知った。禅的な俳句世界に埋没し政治意識をも超越したわけではない。様々な政治的攻撃をうけながらも、信念を曲げず、亡くなるまで第三世界解放への活動を続けた。

長女ジュリア・ライト氏は「彼の俳句は病気に対する自然発生的解毒剤でした」[16]、「父は俳句のお陰で自分を育むことができ・・・沈み込まずにいられたのです」[17]と述べ、カフェやレストランでナプキンにも俳句を書いていたライトの様子を伝えている。健康上の不安、精神的・経済的疲労、そして俳句。この三つが彼の最晩年に実に絶妙なタイミングで出会い「別世界」が立ち上がった。俳句と政治活動は矛盾することなく、俳句は苦境のライトを鼓舞した。その先に彼が見ていた未来をうかがわせる3句を挙げる。

- 【718】 While plowing the earth,  
Hills that were invisible  
Are now to be seen.  
耕せば見えざりし丘今見ゆる
- 【721】 As my anger ebbs,  
The spring stars grow bright again  
And the wind returns.  
怒り退き春星光り風戻る
- 【725】 From a cotton field  
To magnolia trees,  
A bridge of swallows.  
綿畑よりマグノリアへと燕飛ぶ

見えてくる丘、春の星と風、奴隷労働の象徴である綿畑と白人社会の象徴マグノリアの間に橋を架ける希望の象徴の燕、これらにライトの希望を読み取ることができる。placeless, rootless, nobody, lonely という悲哀が消え去ったわけではない。句集の終盤に並ぶこれらの俳句は、ライトが俳句という「別世界」でそれらを乗り越える方法を知り実作した証であると見ることができる。

## 謝辞

本論文の作成に当たり、指導教官の宮本陽一郎教授には二年間にわたり終始、丁寧なご指導を賜りました。特に個別指導では、論文の方向決定に役立つ多くの貴重なご指摘を賜り、ここに深謝いたします。宮本ゼミの皆様にも、多くの助言や刺激を頂き心より感謝いたします。

## 注

- [1] Richard Wright, *Haiku This Other World* (New York: Arcade Publishing, 1988) (以後Wright, *Haiku*)
- [2] Michel Fabre, *The Unfinished Quest of Richard Wright* (Chicago: University of Illinois Press, 1993), 508.
- [3] Wright, *Haiku*, viii.
- [4] Reginald Horace Blyth, *Haiku* (New York: Angelico Press, Ltd., 2019) 第I巻iii. (以後Blyth, *Haiku*)
- [5] Richard Wright, *Black Boy* (London: Penguin Random House UK, 2020), 262.
- [6] Richard Wright, “The Man Who Went to Chicago”, *Eight Men* (London: Penguin Random House UK, 2021), 182.
- [7] Richard Wright, “I Choose Exile”, *The Art of Sunday*, 15 Oct. 2022<<http://www.artofsunday.com/log/i-choose-exile>>, 1.
- [8] “I Choose Exile,” 2.
- [9] Richard Wright, “Black Power,” *Three Books from Exile: Black Power; The Color Curtain; and White Man, Listen* (New York: Harper Perennial Modern Classics, 2008), 102.
- [10] *Three Books from Exile*, 647.
- [11] 木内徹 “Zen Buddhism in Richard Wright’s Haiku.” 『日本大学生産工学部研究報告B』 第39巻 (2006年), 6頁。
- [12] 皆河宗一 「リチャード・ライトと俳句」 『新日本文学』 第29巻第6号 (1974年), 102頁。
- [13] 中地幸 「アフリカン・アメリカン・ジャポニズムとリチャード・ライトの俳句」 『日本女子大英米文学研究』 44号 (2009年), 31頁。
- [14] 高橋悦男 「Five And Seven And Five—Richard Right の Haiku」 『早稲田社会科学総合研究』 第2巻第2号 (2002年), 197頁。
- [15] Blyth, *Haiku*, Vol. 1, 172.
- [16] Wright, *Haiku*, viii.
- [17] Wright, *Haiku*, xi.